

所在地 三重県伊勢市朝熊町
主要用途 美術館 レストラン



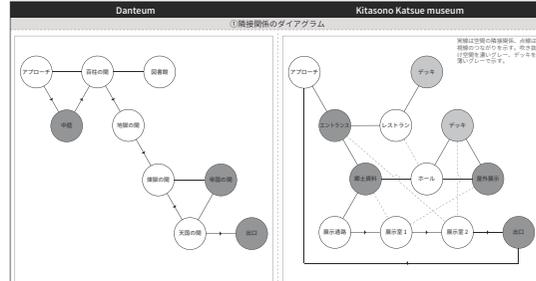
水面に浮上するガラスキューブのイメージスケッチ。木立を反映する。



プロムナードから眺まれる外観。来場者は敷地全体に展開された偶発的な風景を体験する。

構築

転換された意味を「通時性⇌其時性」の考え方から再配列を行い、北園克衛記念館として再構成する。



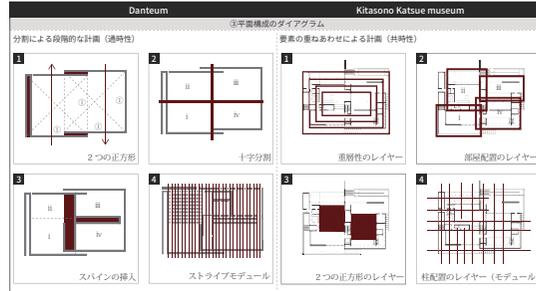
ダンテウムの空間の関係性は物語の不可逆性に対応して極めてシンプルである。来場者空間の移りかたはほとんどなく、来場者は決められた動線歩きながらダンテの体験と自身を想像させる。

各空間は輪軸した関係を持ち、来場者の動線も多種である。末手に現われる文字列の反映など、作者が意識的に方向性を暗示していると思われる箇所のみ、明確な空間とエントランスをつけて表現している。全ての部屋が時の全量と対応しているわけではなく、設計者のイメージの下にある程度の自由度をもって構築される。



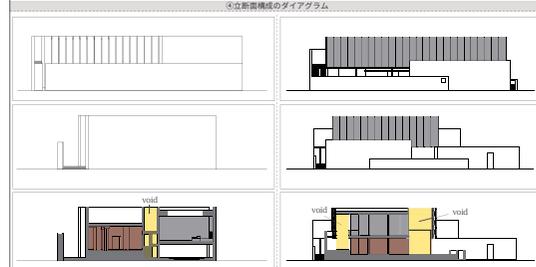
コロッセオを軸とする帝国通り沿いに位置している。不整形な敷地を規定するように矩形で囲い込み、強い立体を形成してから、それを分割して空間を作っている。空間は内部で展開され、内向きで過剰な構成をとる。

敷地全体が一つの構成物である。ダンテウムが内部でその構成が完結しているのに対して、輪軸的なプロムナードによって敷地を分割し、各領域ごとに特色を持たせ、意味を与える。それに対応するように、中心に建築を配置し、各空間と繋ぎ合わせるように機能も配置する。背後を流れる五十鈴川や伊勢神宮、朝熊山に軸を取り配置を決定している。



ダンテウムはマクセンティウスのバシリカから取られた矩形を2つの正方形に分解し、さらに全体を十字に分割することによって段階的なプロセスによって部屋を形成した。さらに、全体をストライプ状に分割することによって柱やスリットのスパインを決定している。

建築の行程から極力時間性を排除し、エレメントの重ね合わせと並置によって平面性を決定した。これによって、来場者は予定外な動線によってではなく、身体によって偶発的な風景を体験する。柱は建築の全体性とは独立して、「陪写機」の文字列から取られたグリッドから導き出され、全体のリズムを生み出している。

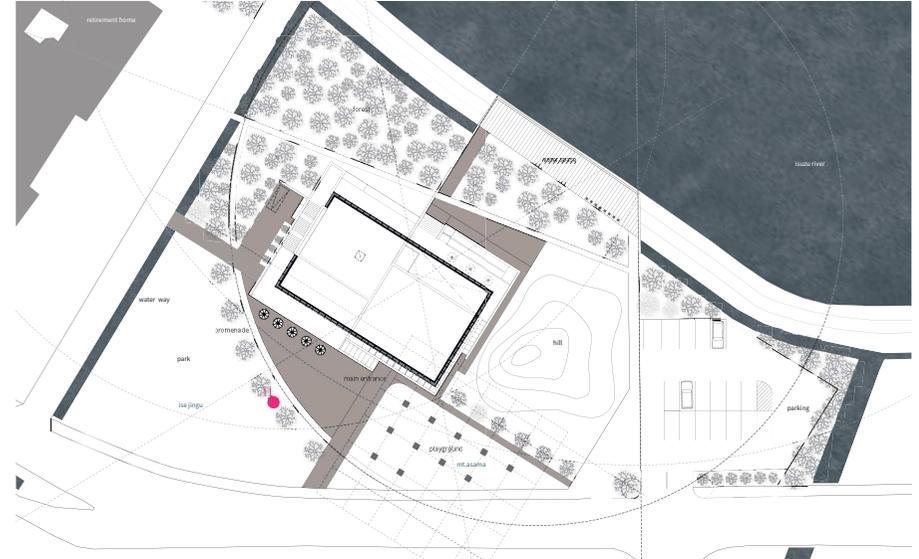


立面構成は、南面通りに面してソリッドな佇まいである。ずれた構成によって生まれたわずかな差異と均一に配列するソリッドが面に奥行きを持たせている。前面を見ると、長手のスパインを軸にしてレベルの異なる断面が傾度状に絡み合っている。

半透明のガラスと重層的な構成によって周辺環境との曖昧な関係を作る。ダンテウムとヴォイドの関係を反映することによって、外部へ視線が誘導されるように計画した。ヴォイドを介して空間同士が連絡する。

配置

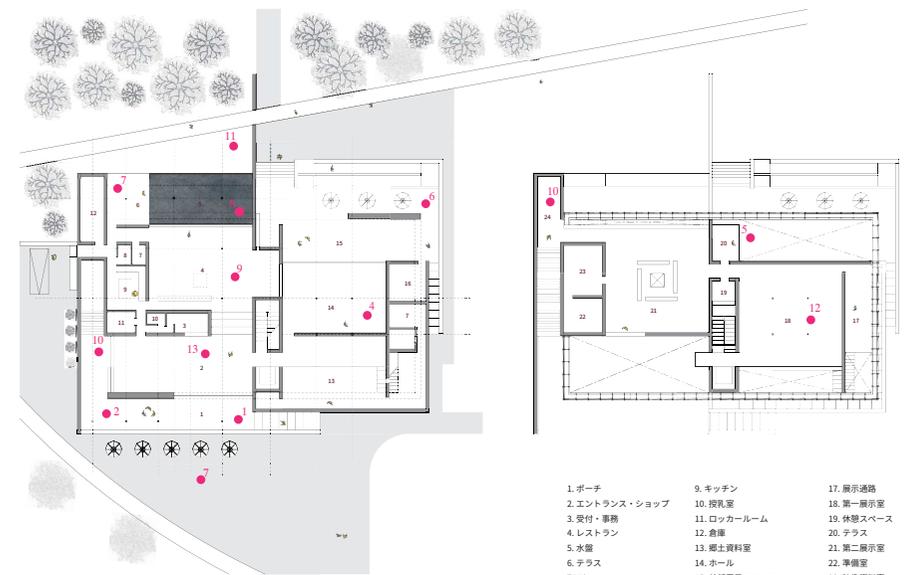
背後を流れる五十鈴川や、朝熊山などを建築に取り込んだ。敷地はプロムナードを引き込むことによって、建築を中心とした四つの領域に分割され、それぞれに性格付けがされている。四つの性格はダンテウムの柱の森や中庭と対応するような意味が与えられ、対比される構成となっている。内部で完結していたダンテウムの構成は伊勢的な重層性によって敷地全域に拡張し、外向きの関係が形成される。



plot S=1:500

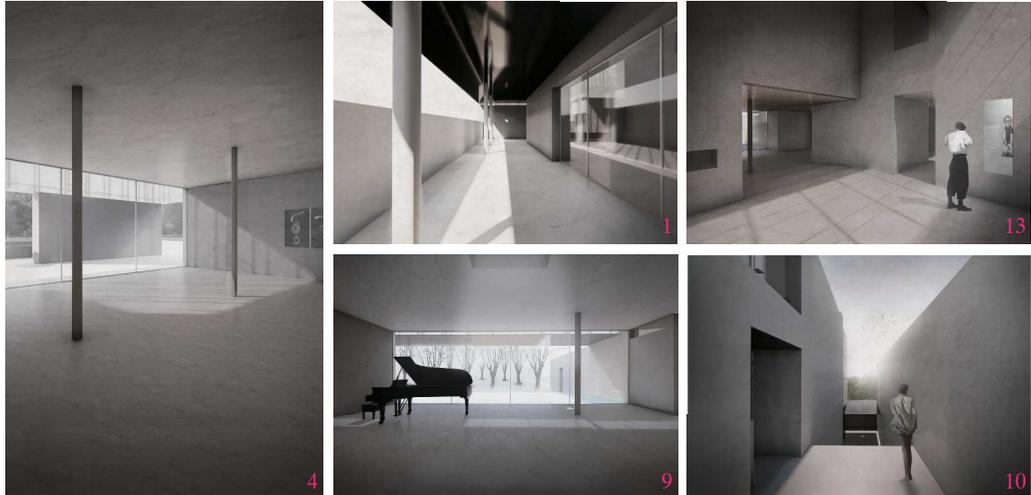
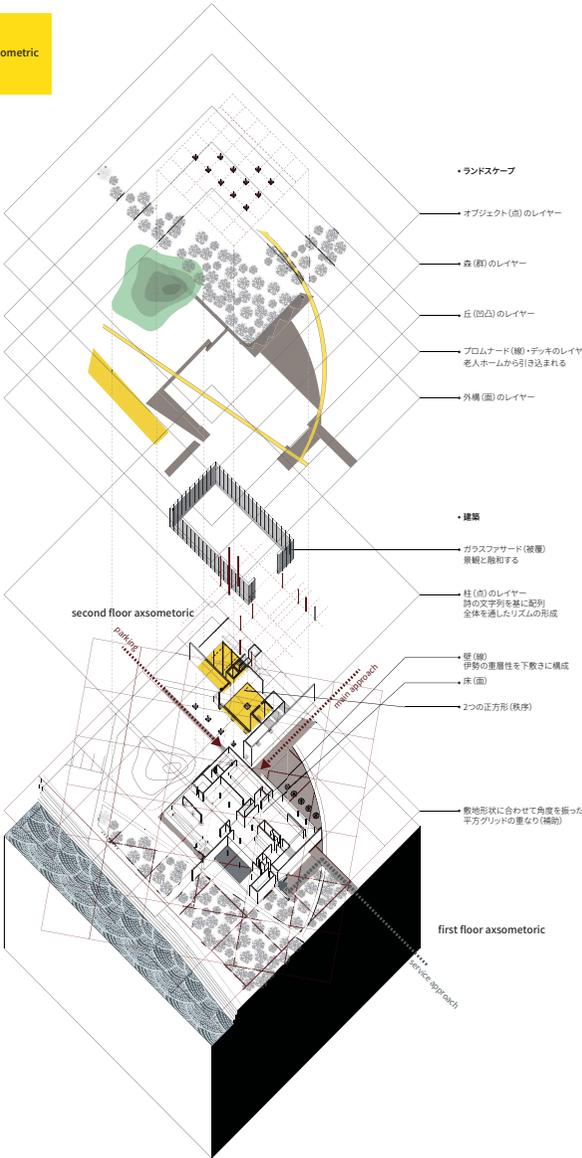
平面

外構と一体的に内部空間を決定している。そして、柱や水廻りコア等の様々なエレメントを横断的に配置し来場者の偶発的な空間体験を意図した。1階では無秩序に空間が転換するが、2階に上がると2つの正方形が全体の軸を形成していたことに気がつく。



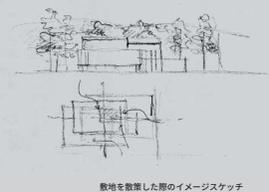
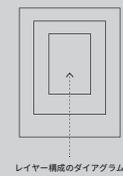
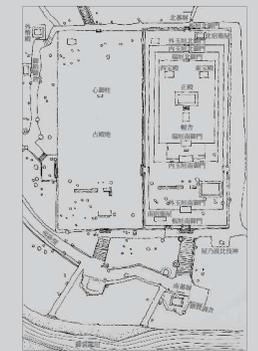
plan S=1:300

- 1. ボーテ
- 2. エントランス・ショップ
- 3. 受付・事務
- 4. レストラン
- 5. 水鏡
- 6. テラス
- 7. W.C
- 8. 休憩室
- 9. キッチン
- 10. 授乳室
- 11. ロッカールーム
- 12. 倉庫
- 13. 紙土資料室
- 14. ホール
- 15. 外部展示スペース
- 16. ワークスペース
- 17. 展示通路
- 18. 第一展示室
- 19. 休憩スペース
- 20. チラシ
- 21. 第二展示室
- 22. 準備室
- 23. 映像展示室
- 24. 出口階段



重層性

伊勢神宮の重層的で包摂的な構成を下敷きとして、それを崩していくことによって全体性を形成する。これはダンテウムがマクセンティウスのバリカを全体性を決定するための一助としていたことに起因する。奥性のあるレイヤーをとることによる性質としての濃淡が、空間同士の多層的なつながりを形成する。



おわりに
—現代の詩的建築—

昨今の建築業界ではアルゴリズムを用いた設計手法が普及したことによって巨大スケールを効率的に処理することが可能となっている。このような潮流において、建築家の役割は日々多様化し、混迷しているが、豊穡たる空間を創造するという本来の目的を見失っていないだろうか。そこで、修士制作で、ナラティブな空間における現代的意義を示したいと考えこのようなテーマを選んだ。

結果として、テラーニが構想したダンテウムの設計プロセスを分析し、自身の手を介して設計へと跳躍したことによって、設計行為に詩的言語が存在することの普遍的な可能性を見出すことができた。詩は空間を想起させ、空間もまた詩を想起させる。この両者の不可分な関係性の一端を本計画において示せたのではないだろうか。特に、設計段階での「通時性」、「共時性」の対立項によるプロセスの整理は、さらなる発展的な設計手法への展開を示唆する方法論の一つとなるだろう。

断面構成

全体を通して点対称な構成である。半外部的な吹き抜け空間を少しずつ介入させることによって空間としての連続性が生まれる。二層のガラスファサードが二枚の壁によって支持され、宙に浮いたような構成をとり、1階はマッスによって場面転換がなされるが、2階では半透過ガラスが周辺環境に柔らかに意識を誘導し、外向きの広がりを感じる空間となっている。

